

# 「世界のタイル博物館」10周年リニューアル

辻 孝二郎  
KOJIRO TSUJI

(INAXライブミュージアム 館長)

テーマは「**装飾する魂**」  
たましい

TOPICS

タイルはなぜ生まれ、壁を飾ってきたのか。5,500年前から現在まで、信仰や暮らしとかかわり、時代の影響を受け、技術の革新があり、タイルはいろいろ変化しているが、なぜ存在し、今も必要とされているのか。紀元前のタイルを見ながらその疑問がずーと残っていた。今回のリニューアルは、それを解決するものを目指した。

タイルの前身といわれる「クレイペグ」は、5,500年前のメソポタミアでつくられている。シュメール人たちは最初に文字をつくったことで有名だが、建築・構造物でも後世に大きな影響を与えている。文字で発見されたエアンナ（豊穡と多産の女神）神域は、構造的にも装飾的にも素晴らしい構築物だったので、粘土釘を使った壮大な装飾がなされていたのである。偉大なシュメール人たちに肉薄すべく、昔のつくり方（手作り）でこの壁を再現した。施工についてもいろいろ議論したが、仕上がりから見て“差し

込む”のではなく、1列ずつ積んでいく方法を採用した。普段は壁を塗っている職人さんが施工したが、彼らの手が5,500年前の手を思い出したようで、この施工方法はかなり正しいと思っている。

世界最古のタイルは、ジェセル王がつくった最古のピラミッドの地下通廊から発掘された。B.C.2650年で、今から4,650年前である。王の魂だけが出入りできる扉、その周辺におびただしい数のタイルが施工されている。粘土のない砂漠地帯で、最古のタイルがつけられるが、変わらない形、永遠の美しさをやきものに求めた古代の人たちの知恵と苦心を知ることができる。当時のつくり方に立ち戻って再現した。

さて、タイル史上に大きな影響を与え、今も見る人々に大きな衝撃を与えるイスラームのタイル文化である。今回のリニューアルの目玉と言っても過言ではない。再現といっても、イスラーム建築に

素人の自分たちでは、完成への道筋は全く見えなかった。暗中模索とはこのようなことだろう。何から始めればいいのか、3次元でのタイル割付けをどう平面化するのか。東京大学東洋文化研究所の深見奈緒子先生に相談しながら進めたが、彼女抜きで今回の完成はない。まさにイスラームドーム再現の道しるべであり、羅針盤であった。「アッラーは天と地の光である」とのことであるが、光が差してきたのは彼女のいろいろなアドバイスを通じてであった。心から感謝したい。また、今回のドーム制作、およびタイル張りには乃村工芸社の力に負うところが大きい。初めての難工事に素晴らしい工夫と対応を行ってくれた。完成はオープン2日前となったが、最後まで手を抜かず、こん根を詰めていただいた。その集中力は、完成品に見事に花開いている。

人間の心にある装飾する魂たましい、それは時代を超え、民族を超え、普遍的であると理解した瞬間であった。\*



長さ10cmの円錐形のやきものである。円錐形は施工して始めて大きな意味があることに気付いた。円柱は円錐形でなければ施工できない

イスラームドーム この空間では1日の光を演出している。イスラームの光と影をねらい、また光の角度によってタイルの表情が劇的に変化する様子を再現している



エジプト・ジェセル王の魂の扉 トルコ石の色をしたタイルは、有名なツタンカーメンのマスクにもトルコ石とともに使われている。銅を使った発色であるが、高貴な人の色でもあるようだ